

## 芥川龍之介「偷盗」論：「白痴」の女が母になることの意味

河内，重雄  
九州大学大学院人文科学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/11030>

---

出版情報：九大日文. 10, pp.20-28, 2007-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 芥川龍之介「偷盜」論

——「白痴」の女が母になることの意味——

河内 重雄

## 一 本稿の狙い

芥川龍之介にとつて初の長編小説「偷盜」<sup>①</sup>は、一章から六章が一九一七年(大正六年)四月の、七章から九章が同年七月の『中央公論』に掲載された。『今昔物語集』を典拠とした作品である。二十五、六歳の美しい女「沙金」<sup>しやきん</sup>をお頭とし、沙金の母の「猪熊の婆」、その夫の「猪熊の爺」、十六、七歳の「白痴」に近い天性を持った下衆女「阿濃」、阿濃に慕われている十七、八歳の美しい若侍「次郎」、その兄で二十歳くらいの醜い隻眼の侍「太郎」達によつて盗賊の一群はなつており、彼らの人間関係を描きつつ物語は展開する。

様々な「偷盜」論が書かれているが、阿濃をどう捉えるかがこの作品の解釈のポイントとなることについては諸説共通している。例えば、海老井英次氏「偷盜」への一視角<sup>②</sup>、越智治雄氏「偷盜」<sup>③</sup>、両論の上に立つて、三好行雄氏は、「思念の惑いを知らぬ痴呆」であるが故に「無垢の母」である阿濃を「畜生道に落ちた悪を(人間の悲しみ)にまで浄化する救済」者と

捉えている<sup>④</sup>。三好論に限らず、(全集所収の「手帳」)中の構想メモ「There is something in the darkness; says the elder brother in the gate of Rasho」の「something」とは何ぞや」といった問の立て方をすると、「羅生門」<sup>⑤</sup>のモチーフとされている人間のエゴイズムによる対立を阿濃の「阿呆」な母(「疑うことを知らない無垢の母」)によつて超克する(something ≡ 無垢の母による救済のモチーフ)といった結論に落ち着くことになる。あるいは、「偷盜」をジェンダー論の観点から読む中村清治氏「偷盜」における男性性の機制——疑う男たちの物語——<sup>⑥</sup>は次のように述べている。

例えば、加納美紀代は、この時期、一九一〇〜一九二〇年代に「母」がイデオロギーと化していく事態を捉えて、その特徴を、「母性」が「自己犠牲と無限抱擁」<sup>⑦</sup>含み持ち、「近代的な自我を真向から否定し、女に「無我」と「献身」を要求するものとなった」と指摘する。(略)

このような同時代コンテクストから振り返ってみれば、「白痴に近い天性」の女として形象されていた阿濃が、加納の指摘する「近代的な自我を真向から否定」された「母」<sup>⑧</sup>「母性」イデオロギーを、見事なまでに体現させていることはもはや疑いようのない事実だと思われる。しかも注目しておいていいのは、阿濃は、「偷盜」の他の登場人物たちから「阿呆」な女だと言われつづけていたことであろう。それはまさに、この「阿呆」という言葉の一点におい

て、「偷盜」が、同時代コンテクストにおける「母」の置かれた位置を、ほぼ正確に言い当てていることを示しているからである。「近代的な自我を真向から否定」され、まさに「阿呆」となった「母」には、女たちをそのように言い得る男たちが想定されているからであり、そこには、女より優位に立つ男の姿が含意されている。

「白痴」で「阿呆」の阿濃が一九一〇年から一九二〇年代の日本の「母」の与えられた位置を表しており、その裏返しとして男性が自己を規定しているということからも、阿濃の解釈の重要性がうかがえる。

阿濃をどう捉えるかが作品解釈のポイントとなることは筆者も認めるところである。しかし、従来の論に対し筆者が疑問に思うのは、「偷盜」という作品は母なる存在に力点があるのではなく、素直に「白痴」の女が母になるということを問うている、大正時代という現代の小説として読めないのか、ということである。例えば、登場人物達は阿濃を「阿呆」と言っているのに対し、彼らを語り解釈を加える現代の語り手はわざわざ「天性白痴に近い」（九章、傍線筆者、以下同）と歴史的な言葉でもって阿濃に言及していることや、「隻眼」（二章）や「疫病」（二章）、「蹙いぢの乞食」（二章）といった散見される病的な描写（「白痴」は何かの象徴等ではなく、まさに病としての「白痴」を描こうとしたと考えられる）、さらには、阿濃は最初から母として登場するのではなく、墮胎させられそうになりながらも母になるという展開を考えると、

「偷盜」は「白痴」の女が母になるということの問題にしていると思われるのである。

加えて、これまで論じられることはなかったが、七章の阿濃の描写、

盗人たちは、それを見ると、益々何かと囁し立て、腹の児の親さへ知らない、阿呆な彼女を嘲笑った。が、阿濃は胎児が次郎の子だと云ふ事を、緊く心の中で信じてゐる。さうして、自分の恋してゐる次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然の事だと信じてゐる。この楼の上で、独りさびしく寝る毎に、必夢に見るあの次郎が、親でなかつたとしたならば、誰がこの児の親であらう。——阿濃は、この時、唄をうたひながら、遠い所を見るやうな眼をして、蚊に刺されるのも知らずに、現ながらの夢を見た。人間の苦しみを忘れた、しかも又人間の苦しみに色づけられた、うつくしく、傷しい夢である。（涙を知らないものゝ見る事が出来る夢ではない。）（そこでは、一切の悪が、眼底を払つて、消えてしまふ。が、人間の悲しみだけは、——空をみたしてゐる月の光のやうに、大きな人間の悲しみだけは、やはりさびしく隙に残つてゐる。……）

と、「戯作三昧」の十五章の馬琴の描写、

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。

反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を駆つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を払つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の敵かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鉱石のやうに、美しく作者の前に、輝いてゐるではないか。……

は似ているが、なぜ阿濃と馬琴の描写は似なければならなかつたのかということも、「偷盗」に関して疑問に思うところである。この類似について結論めいた書き方をするならば、「白痴」の女が母になることを問う上で必然的に似てしまつたのだと筆者は考へている。

以下、この類似に着目しつつ、大正時代に「白痴」の女が母になるといふことの意味を考察する。

## 二 「眼底を払つて、消え」る「一切の悪」とは

一瞥して分かるように、両作品とも「眼底を払つて消えてしま」うという表現が共通して用いられているが、「戯作三昧」では消えるのは「利害」等、「偷盗」では消えるのは「一切の悪」となっている。次章の最後で述べるが、「利害」等と「一切の悪」、これら二つの間の距離は実は思ひのほか近い。先回りして言えば、「白痴」の阿濃が母になるには「一切の悪」が消える必要があつたのだが、本章ではその消えるべき「一切の悪」とはどのようなものかを確認する。

これまで、この「一切の悪」とは（「羅生門」の下人と老婆、「偷盗」の太郎と次郎の間のやうな人間のエゴイズムによる対立のことであるとすると）読みが一般になされてきた観がある。しかし、人間のエゴイズムによる対立に限定すると、「一切の」という形容は大げさに感じられないだろうか。このような自明化した限定を一度取り払い、大正時代という歴史的文テクストの中に「偷盗」をおいて読んでみるとどうなるか。

例えば小俣和一郎氏は『精神病院の起源 近代篇』（平成十二年七月 太田出版）で、一九〇〇年（明治三十三年）に施行され、その後の精神病者のあり方を大きく規定した「精神病者監護法」について、精神病が医療によつてではなく治安によつて管理されるようになったと述べている。この法によつて座敷牢での私宅監置は合法化されたのだが、私宅監置を批判した精神病学の大家の呉秀三<sup>⑧</sup>も精神病者の治安上の危険さについては積極的に肯定していた（だからこそ、然るべき精神病院の増設、そこでの患者の治療を訴えていたのだ）。その点については、「白痴」教育の必要

性を主張していた学者達(三宅鯨一等)も同じ穴の貉と言えろ。精神病者即ち悪という論法が成立していた訳である。大正当時、

精神病というカテゴリーは広く、躁鬱病や悖徳病(道徳的観念の欠如)、ヒステリーや神経病等がお互いの境界線も必ずしも明らかでないまま放り込まれていたが、なかでも「白痴」は精神病のなかで(知覚等の精神の働きだけでなく、道徳面においても)最も劣ったものとされていたと考えられる<sup>9)</sup>。大正六年六月末に内務省主導で精神病者の全国一斉調査が行われ、全国には六万五千人もの精神病者(東京が最も多く、四千四百五十人)がおり、そのうち精神病院や神社仏閣に收容されている者は五千人にすぎないこと、残りの六万人の私宅監置患者のうち十五歳未満の男女には「白痴」が圧倒的に多いこと、精神病者は年々増加しており、これからも増えるであろうこと等が指摘された。年々増加する「白痴」を最悪とする精神病者は、治安上の危険を理由に、精神病院や座敷牢に入れられ、社会的に隔離・管理されていたのである(「餓にせまつてした盗みの咎で、裸の儘、地藏堂の梁へつり上げられた」(「偷盗」七章)に近い状態も珍しくはない)。

無論、精神病院や座敷牢に入れられていた人達が悉く大人しくしていた訳ではあるまい。建物に放火したり、逃げたりする者も稀ではなかったようである。明治四十三年から大正五年まで、一府十四県の私宅監置の状況を調査し、報告した呉秀三・榎田五郎「精神病者私宅監置ノ実況及其ノ統計的觀察」にも、放火や逃亡についての記述は散見される。このような逃亡とも関わると思われるが、木村庶務課長「白痴の保護施設」(「変態

心理」第十四号 大正七年十二月)には次の一節がある。

市内の区役所や警察から送られて来る浮浪少年少女の鑑別は、毎月一回宛行つて欠陥のある者は其向きの收容所へ收容し、女の方は横浜の家庭学院へ依頼して居つた。鑑別委員の話に拠ると、浮浪少年少女の多くは白痴者で、少女であれば見ず知らずの男にでも弄ばれると云ふ風な痴呆者が多い。そして白痴者は普通人に比較すると非常に繁殖力が強く、公安の上からも人種改善上からも非常に遺憾な事である。

「公安の上からも」は「白痴者」の犯罪行為・先天的な犯罪者性のことだが、ここではそれだけではなく、「白痴」の少女が見ず知らずの男に弄ばれることも珍しくないこと、「白痴者」は「普通人に比較すると非常に繁殖力が強い」こと、そのことは「人種改善上」厄介であることも述べられている。「人種改善上」とは社会ダーウィニズムと考えてよいが、「白痴」は遣伝すると考えられていたため、容易に男に弄ばれ、かつ「繁殖力が強い」ことは厄介という訳である。このことから、精神病者の社会的隔離・管理には、単に公安上の理由からだけでなく、彼らを性から遠ざけるという意図もあつたと思われる。事実、精神病院内で男女を別々に收容すること等も当時積極的に取り組まれていた。「白痴者」の恋愛や性、出産の否定である。

こういつたことを「偷盗」に引き付けてみると、例えば阿濃

が臨月であることに太郎が「嘲るやうに口を歪めた」（一章）ことや、それを受けての猪熊の婆の「あの阿呆をね。誰がまあ手をつけたんだか——尤も、阿濃は次郎さんに、執心だつたが、まさかあの人でもなからうよ。」という笑い、阿濃への墮胎の強制には、「白痴」の女の恋愛や性、出産への蔑視がうかがえる。「白痴」の阿濃を「手ごめにし」（八章で「弄んで」、阿濃を妊娠させたのは猪熊の爺である。大正当時、「白痴」は子供に遺伝するとされていたが、父親（猪熊の爺）の大酒も生まれてくる子供に「白痴児」が生まれてくる等の悪影響を及ぼすと考えられていた。社会ターウィニズムといったイデオロギーや秩序の安定といった観点からすれば、「白痴」の阿濃と大酒飲みで犯罪者の猪熊の爺の間の子供が生まれてくる（阿濃が母になる）ことは「悪」であり、そのような価値基準を有する読者にとつて阿濃に墮胎薬を強要することは「悪」ではなかつたのではあるまいか。弄ばれ、妊娠すればそれはそれで否定される、ここにも「白痴者」の性や出産への否定的なまなざしがうかがえよう。「赤糸車の女車」（三章や、「太郎の方へ」「胡散らしく」眼をやる車の付き添いの「牛飼の童と雑色」に代表される上層階級や一般社会、そこから見て劣つた存在である太郎達「偷盗の一群」、その中でもさらに劣つた者として盗人達から虐げられる阿濃（七章）という描き方は、社会の「悪」の中の「悪」、「人種改善上」のお荷物の中のお荷物という「白痴者」が置かれていた位置をよく描いている。さらに、「白痴」と「公安」について言えば、阿濃は太郎や沙金とは違って殺人等の犯罪に手を

染めてはいないのであろうか。「偷盗」一章には藤判官の屋敷を襲う人数について、「何時もの通り、男が二十三人。それに私と娘だけさ。阿濃は、あの体だから、朱雀門に待つてゐて、貰ふ事にしようよ。」という猪熊の婆の台詞がある。今回は臨月だから強盗に加わらなかつただけで、これまで何度も阿濃は参加してきていると考えるべきであらう<sup>(10)</sup>。先ほど筆者は犯罪者の猪熊の爺と書いたが、犯罪者、それは阿濃にも当てはまるレットルと言えよう。

「白痴」の浮浪少年少女と犯罪にも関わることで、もう少し述べておくと、当時、「白痴者」を含め不良少年少女が社会的に問題視されていた。山本清吉『実際より見たる刑事警察』（大正四年一月増補第二版 清水書店）には次の一節がある。

六、不良青年子女 茲に刑事警察上呑寧る国家の爲め最も憂慮す可き一事あり、即ち近来其弊害最も甚だしきのみならず将来も亦倍々増加の傾向を呈しつゝある彼の青年子女の不良行為は是れなり、(略)爾來倍々不良青年子女の増加して今日に至りしのみならず、彼等の不良行為倍々増長して強窃盜、詐欺横領は言ふ迄も無く甚だしきに至りては強盜殺人等極悪無道の行為を爲さず敢て行ふ者出づるに至りては実に寒心の至りならずや、(略)

而して女子も亦彼等の爲めに誘惑せられて墮落し終に売春婦と成り酌婦若くは娼妓と爲りて、自ら却て数多の男子を誘惑墮落せしむるの奸手段を施すに至るのみならず、同

氣相求むる同性若くは良少女を誘ふて以て墮落せしめ終には共に俱に万引、パクリ、女詐欺師若は目見得泥棒と称する窃盗と化し、彼等又黨を為して各所を横行して犯罪を以

て常習と為し淫猥を以て事とするに至り殆んど執拗治す可からざる者あるに至りては豈驚かざるを得んや、彼の元麴町区三番町辺に住せし陸軍少佐某の娘と云ふ真壁のお鉄と称する女の如きは、相当の家庭に育ち高等女学校三学年迄修業し相当の教育を受けたる身なるに拘らず、一夜不良青年と交を結びたるが原因となり終には自ら多数の不良青年を咬<sup>くは</sup>えて情夫と為し、又自己の部下と為し女俠客を以て自ら任じ、常に短刀を懐ろにして不良男子の仲間に入り喧嘩口論を事とし、又之を仲裁するを以て無上の快樂とし、終には其資料に尽きて売春婦と成り或は某支那人の妾と為りて金品を貪り、之れを己れの情夫若くは配下の不良青年に貢ぎて以て不義の快樂を貪り居りたる者さへあるに非ずや、(略)彼等は自ら犯罪者と為るのみならず、実に犯罪者を養成す可き所謂犯罪の震源地と為り居れり、(略)

「殆んど執拗治す可からざる者ある」は精神病における悖徳病を、「真壁のお鉄」はほとんど「偷盜」の沙金を思わせるが、「偷盜」登場人物の年齢設定の若さや、太郎や次郎、阿濃が沙金に誘われて犯罪集団に入り、党をなしての強盜や殺人(「それが、今では、盗みもする。時によつては、火つけもする。人を殺した事も、二度や三度ではない。」(三章)、淫売行為(「日頃は容色を売つて」(三章))

といったことは、当時問題とされていた不良少年少女の集団を意識してのものだったのではあるまいか。

本章をまとめる。眼底を払つて消える「一切の悪」、それは、何も人間のエゴイズムによる対立に限る必要はない。「偷盜」発表当時の社会ダーウィニズム(人種改善)イデオロギーや治安上、「悪」の中の「悪」とされた「白痴者」の存在そのものやその出産(多産)という「悪」、さらにはそれとも関わる不良少女達の「悪」をも含めて考えてよいのではあるまいか。

### 三 「一切の悪が、眼底を払つて、消えてしまふ」とは

「一切の悪が、眼底を払つて、消え」るのは、阿濃が羅生門の二階で一人でみる現ながらの夢の中である。再び引用する。

阿濃は胎児が次郎の子だと云ふ事を、緊く心の中で信じてゐる。さうして、自分の恋してゐる次郎の子が、自分の腹にやどるのは、当然の事だと信じてゐる。この楼の上で、独りさびしく寝る毎に、必夢に見るあの次郎が、親でなかつたとしたならば、誰がこの児の親であらう。(七章)

阿濃がいつもみる夢がどういふものなのか、具体的には描かれていない。しかし、「現ながら」(「現実感のある」の夢であり、阿濃が「胎児が次郎の子だと云ふ事を、緊く心の中で信じてゐる」ことから、(出産につながるような次郎と愛し合う夢と考え

られよう<sup>(1)</sup>。しかし、前章で確認したように、大正期の「白痴」言説に従う限り、「白痴」の女である阿濃と次郎の愛や性は「悪」であり、阿濃は次郎と愛し合う訳にはいかない。阿濃が次郎と自由に愛し合い母になるには「一切の悪」が消えなければならぬ。「一切の悪」が消えた時、阿濃は無条件に公安上「人種改善上」厄介なお荷物である「白痴児」を多産する「白痴者」でも犯罪者でもない母になることができる。

「白痴者」が母になることを許せるか否かを問うことは、社会ダーウィニズム(人種改善)イデオロギーや公安の都合、つまりは一般社会やエリート層の利害や価値基準、(精神病者即ち悪とするような)思考枠組みを問い直すことにつながる。「一切の悪」が消える時(「白痴」の女が「白痴」ではなく母になる時)、これらの価値基準や思考枠組みもその効力を失っている。実際、一般社会やエリート層にとつての利害や価値基準など、問答無用で「悪」のレッテルを貼られた人達にとつていかほどの意味や意義があるろう。「白痴者」にはいわゆる常識的な「悪」の観念道徳観念が欠如していたり、育ちに欠け(「徳徳病」と当時考えられていたようだが、そのような当時の「白痴」言説を逆手に取り、社会一般の「悪」の観念をもたぬ「白痴者」(阿濃)自身によつて世界の意味が再構成される。これは、天才言説当時、天才も精神病の中に入れられていたを下敷きにして、「利害」や「毀誉に煩はされる心」が「眼底を払つて消え」ることで、「人生」が「新しい鉱石のやうに」輝いた(「世界の意味が再構成される」)「戯作三昧」の馬琴に通ずるものがあると言えよう。

そして、もつと広げて言えば、「一切の悪」の根底には人の眼という問題が横たわっているのではないか。前章で確認した「白痴」言説(その言説を生産する一般社会やエリート層のまなざし)はその典型だが、(「あいつ<sup>(2)</sup>」は駄目だ)などと一方的に決め付ける人の眼(言説やイデオロギーをも含めた)こそが、「一切の悪」の源泉ではなからうか。そう考えて、「偷盗」の阿濃以外の登場人物に目を向けてみると、例えば太郎は「一人の弟を見殺しにすると、沙金に晒はれるのを、恐れた」から次郎を助けた、「己の二十年の生涯は、沙金のあの眼の中に宿つてゐる。」と思つている(三章)。次郎は兄の眼に映る自分を気にしており(「たつた一人の兄は、自分を敵のやうに思つてゐる。」)、沙金の眼に「侮蔑と愛欲」とを見てその眼に支配されている(四章)。猪熊の爺は太郎が猪熊の爺をどう見るか(「親」か、太郎がタブー視するところの近親相姦を犯す「畜生」か、「人間」か)を太郎に問うている(五章)。「悪」の中の「悪」と見なされ、だからこそ「一切の悪」を消し得る「白痴」は、人の眼と「悪」という問題を考える時、最も分かり易い例であろうが、この問題は何も「白痴」だけに限つた問題ではない。「偷盗」において「白痴」のみる現ながらの夢が「人間の苦しみ」、「一切の悪」と、普遍性を帯びているのは、この問題は「白痴」に限つたことではないということを表している。そして人の眼と「悪」という問題は、「戯作三昧」の馬琴とも関わっている。例えば太郎同様、眼に障害のある「眇の小銀杏」の「悪評」に、馬琴は苛立つている(「毀誉に煩はされる」)し、「改名主の凶書検閲」(十二章)といつた公儀の眼(イデオ



ロギ)も馬琴は大いに気にしている。「偷盗」と「戯作三昧」両作品に共通するのは、一方的に「悪」と見なす人の眼からの解放、自分で自分を決定する(まなぎす)眼の確立(「自分も母になれる」(七章)という阿濃の母としての自己規定)であり、同時に「一切の悪」や「利害」、「毀譽に煩はされる心」が消えることであると言えよう。

#### 四 「自分も母になれる」という内なる思い

図書館中の本を読んでいると言っても過言ではないほどの読書量で何かを踏まえて小説を書くことに芥川の特徴があるとすれば、「偷盗」の「白痴」表象は大正当時の「白痴」言説を踏まえてなぞることで強化してしまっている側面は大いにあると言える。しかし、人は自己のこれまでの言語的体験を超える形で世界に意味を与えることは容易ではないであろうし、そうであれば芥川(あるいは作家を)のように批判してみても、それは結局のところお互い様なのかもしれない。筆者が注目したいのは、「白痴」言説を強化してしまっているといったことではなく、これまで直接的に描かれることのなかった、「白痴者」自身はどのようなように思っているのか、「白痴者」の内面に注意を向けてそれを描いたということである。

「自分も母になれる」と云ふ喜びだけが、この凌霄花のほひのやうに、さつきから彼女の心を一ぱいにしてゐる(七章)。「完全に幸福になり得るのは白痴にのみ与へられた特権である。」

とは「侏儒の言葉」<sup>(12)</sup>の「樵の葉」の一節で、今日からすればこの「樵の葉」の一節はエリートの手勝手な言い草のようにも思われる。しかし、「白痴者」の内面へ想像力を向けたことは評価してよいのではあるまいか。芥川は後に「河童」<sup>(13)</sup>の中で、「これは国木田独歩です。轢死する人足の心もちをはつきり知っていた詩人です。」と書いている。「轢死する人足の心もち」を書いた作品とは「窮死」<sup>(14)</sup>のことだが、その三年前に国木田独歩は「春の鳥」<sup>(15)</sup>を発表している。筆者は以前拙稿<sup>(16)</sup>で、「春の鳥」の語り手「私」は「白痴」の少年「六蔵」の内面を翻訳・代弁しようとして失敗していると論じたが、芥川の「偷盗」の語り手は阿濃の内面を(わずかではあるが)直接語っている点で、「春の鳥」の語り手の一歩先に進んでいる。代弁行為のもついかかわしさは考える必要があるであろう。「自分も母になれる」という阿濃の思いを「白痴者」の思いと一般化しないよう注意する必要もあろう。その上で、その内面に注意を向けられることのない人達の内面に想像力を向けて、世界の意味を問い直すことを試みている作品として、「偷盗」は評価されてよいと考える。

#### 【注記】

- 1 以下、芥川作品の引用は全て『芥川龍之介全集』全二十四巻(平成七年一十年 岩波書店)によった。
- 2 『語文研究』三一・三三(合併号(昭和四十六年十月))。
- 3 『国文学』臨時増刊号(昭和四十七年十二月)。

4 「下人のゆくえ——「偷盜」論の試み・その一——」（『日本文学』昭和四十八年七月）。

5 『帝國文学』（一九一五年大正四年十一月）。

6 『日本文学研究』第五十一卷第一号（平成十一年六月）。

7 一九一七年（大正六年）十月二十日から十一月四日の『大阪毎日新聞夕刊』連載。

8 呉秀三・樫田五郎「精神病者私宅監置ノ実況及其ノ統計的觀察」（『東京医事新誌』第二〇八七号 大正七年七月）で批判。

9 例えば石田昇『新撰精神病学』では脳の階級を十一に分け、「白痴」を最下級としている。石川貞吉「看過され易き精神異常者」（『変態心理』第十五号 大正八年一月）には次の一節がある。

其の他白痴属に併立して悖徳狂なるものがあると云ふ事は、長い間論争された事でありますが、今日では非常な不道徳的犯罪者の多くは、白痴に属することも判つて来ました。併し又一方に於てはどうしても白痴でなくて、道徳感情の欠乏して居る所謂悖徳狂に近い特種の患者があると云ふ事も、一般に承認さる様になつて居ります。

10 「偷盜」九章には阿濃の「主人がよく人を殺すのを見ましたから、その屍骸も私には、怖くも何ともなかつたのでございます。」といった台詞があり、自分は人を殺したことがないといったような口ぶりだが、検非違使の取調べという状況は考慮すべきであろう。

11 三宅鉞一「白痴及低能児」（大正三年二月 吐鳳堂書店）には「夢二見タルコトヲ醒覺後暫ク事実ト信ズルコト往々アリ。」といった指摘がある。

12 一九三三年（大正十二年）一月発行の『文芸春秋』創刊号から、一九二五年（大正十四年）十一月発行の同雑誌第三卷第十一号まで、三十回にわたり掲載。

13 『改造』第九卷第三号（一九二七年昭和二年）三月）。

14 『文芸倶楽部』（一九〇七年（明治四十年）六月）。

15 『女学世界』（一九〇四年（明治三十七年）三月）。

16 「春の鳥」論——「英語と数学」の教師とは何か——」（『九大日文』四号 平成十六年四月）。

（九州大学大学院人文科学府博士後期課程三年）